

<理由が言えない・「わからない」と言う子>

本人なりの理由はあるとしてもそれをうまく表現できず、そのため周りから理解されなかったり、わがままだと思われたりする子がいます。理由を説明された時も、理解ができないために周りの意見を聞かずに、頑固に自分の意見を主張してしまうこともあります。



通常の発達の場合…

- 3歳前後 「どうして？」と聞く。→理由を言動の判断規準に。
- 4歳前後 理由を答えたり、行動に理由付けをしたりできる。
- 5歳頃 他の子に「～しよう」と一方的に宣言。
- 6歳頃 「〇〇だから、～しよう」と、理由を付けて提案。

このような発達を経ていない場合…

- 理由付けができないので、宣言・命令型になりがち。
- 上から目線と思われる。距離を置かれる。

○コミュニケーション能力を伸ばすステップ

①「なんで？」と質問してこない段階

結論を先に言ってから、簡単に理由を付け加える。
→理由の存在に気づき、自分で説明する力の基礎となる。



②「なんで？」と質問しても答えが理由にならない段階

例：「なんで手を洗うの？」→「手を洗うから。」
理由の選択肢を出したり（「きたないから？きれいだから？」）、例を挙げたりして理由の表現を教えることが有効。

③自分なりの表現をする段階

社会的なルールなどを実体験から学ばせ、それが行動の根拠になるように、理由付けの内容を広げる。理由を添えて話せたら、なるべく要求がかなうように対応するとよい。例：「のどが渴いたから、ジュースをちょうだい。」
また、悪いことをしたときだけ理由を問いただすと「理由を聞かれる」＝「責められる」と子どもが感じてしまうため、楽しいことや好きなことについて理由を聞くように気を付ける。

◎子どもの「わからない」には、次のような背景が考えられます。



①質問の意味が「わからない」

質問の意味がわからずに「わかりません」と答える場合があります。子どもにわかる言葉を選び、短い文章で「一文一意」で質問することが大切です。

例：△「本当は学校が嫌いじゃないのに、どうして行きたくないの？」
→「お友達と遊ぶのは楽しいよね。学校行きたい？」

また、「嫌いじゃない」のように否定文が続くと子どもにはわかりにくいそうです。

②答え方が「わからない」

質問の意味はわかっても、答え方がわからない場合があります。例を出して質問したり、選択肢を出したりすると、答えやすくなります。

例：「お友達になんて言われたの？〇〇？△△？」



③緊張から「わからない」と答える

何、誰、どこ…のような質問には答えられるのに、「どうして」と聞かれると答えられない子がいます。（「どうして」に答える方が難易度が高い。）特に「どうして〇〇したの？」という質問は、トラブルの時に詰問調で使われがちです。その経験から、「どうして、なぜ」の疑問詞に身構える子がいます。そういう子には「どうして〇〇したの？」よりも「そのとき何がしたかったの？」というように、疑問詞を変えて聞く方がうまく答えられる場合があります。

